

## 「かご漁業」 効率的で場所を選ばず

### 網目調整し乱獲防ぐ

「かご漁業」とは、通常えさを取り付けたかごを海底に仕掛け、匂いにつられて入ってきた生物を捕る漁法である。えさの誘集効果が高いため、大変効率の良い漁業といわれている。さらに網をひくのが困難な深海や、起伏に富んだ場所での操業が可能であることから、富山湾では盛んに行われている。

富山湾でかご漁業の対象となっているのは、ベニズワイ、バイ類(バイ貝)、ホッコクアカエビ(アマエビ)やトヤマエビなどのエビ類を中心に、ミズダコなどである。

えさには冷凍サバ、ホッケ、小さなソウダガツオ、シイラ、ベニズワイの水ガニといった商品価値の低い魚やカニ、「マスのすし」を作る際に出るマスの中落ち(頭や背骨など)といったものが使用される。

漁獲対象とする魚種やサイズ、仕掛ける場所によって、用いるかごの形や網目の大きさが異なっている。ベニズワイを捕るカニかごは、バイ類やエビを捕るものよりも大きなかごが用いられる。

当然のことながら、網目が大きければ小型の個体は網から抜け出し、大きな個体のみが捕獲される。資源保護が課題となっているベニズワイ漁用のかごは、網目の大きさを表すめあい目合が15cmのかごを現在使用している。

かごが仕掛けられた直後は、えさの誘因力により大小さまざまなカニがかごの中に入るが、4日ほどして中のえさが食べ尽くされると、こうはば甲幅(甲羅の幅)9cm以下の小型の個体は網目から抜け出して行くことが分かっている。

ベニズワイでは資源保護のため、甲幅9センチ以下の雄とすべての雌(雌は最大でも甲幅8cm程度にしか成長しない)が漁獲禁止となっている。したがって、現在用いられているカニかごは、資源管理にもつながる合理的な漁具と言えるのではないだろうか。(前田経雄)



餌のサバが付けられたベニズワイかご  
(かご上面中央の陥入口からカニが入り、円筒形の白いプラスチックが返しとして機能する。)